

バック・ブレッカー著

『変人の美学——近世日本の「畸」と「狂」』

W. Puck Brecher. *The Aesthetics of Strangeness: Eccentricity and Madness in Early Modern Japan*. University of Hawai'i Press, 2013

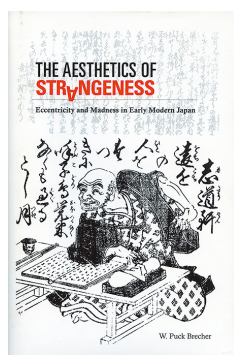
ニールス・フランステインパール(朝倉和子訳)

「出る杭は……」(打たれず)もてはやされる？

近世日本には個性的な人物が少ないといまだに考えがちな学界風土にあつて、冒頭のような文言に眉をひそめる人は少なくないだろう。しかし、この見解は江戸期に登場した「畸」(奇)礼賛の背後にある時代の空気を正確にとらえている。たとえば、縞柄にとりつかれた「縞の勘十郎」(二六頁)、自分の生前葬をやつてのけた山崎北華(六〇頁)、門前に尿桶を置いて裕福な客人を「もてなした」池大雅(七二頁)など、それが誰であれ、型破りの奇行やそれを行う張本人たちは、社会に対する破壊行為、破壊者とは見なされなかった。それどころか彼らは当時の人々の賛美的となり、その伝記はベストセラーになった。本書はこういう痛快な

前提を出発点に、(主として文人の)逸脱行為がいかに社会から寛容に迎えられ、そればかりか、いかにしてソーシャル・キャピタル(社会関係資本)すら獲得していったかという議論を展開していく。

これまでの学説は彼ら近世の畸人たちを、結局は政治変化をもたらすまでに至らなかった破壊分子、もしくは「近代的」エートスの萌芽をもたらした英雄と見なしてきたが、本書の著者バック・ブレッカーはいずれの解釈も否定したうえで、「美学としての畸がどのように登場し、社会的アイデンティティーとして発展し、江戸社会にインパクトを与え続けたかについて、分野をまたいで再考し」(二二頁)ようとする。そして本書はまさに分野をまたぐ労



作である。著者の視点は驚くほど多岐にわたり、思想史、人物伝、美術史を紡ぎ合わせて、豊かな発想と逸話の満載された高度な論理で語りかけてくる。江戸時代に興味を持つ人なら誰をも引きつけずにおかない。

すつきりとわかりやすい序文に続き、本書は中国文化の「隠棲」「狂」「無用」という先行例を土台として、十七世紀後期の日本に「畸」がいかに登場したかをたどっていく。そして続く三つの章では、十八世紀に入って「畸」が「個人の快楽のための独立した美の領域」（九〇頁）を築くための文人のツールへと変貌し、「畸人」ブームの嚆矢となる伴蒿蹊の『近世畸人伝』（二七九〇）によって「畸」が土着のエートスに浸透し、やがて日本社会になじみ、商業化されていくさまを詳しく描く。最後の二章では、この商業化の進展によって、文人文化における「畸」の社会的価値が薄まり、その結果、この概念がいかに「対抗文化的勢力や政治的反体制派」に乗っ取られていったかが語られる。

字数に限りがあるため、この本の持つおびただしい長所をすべて紹介することはできないので、こうするともっと良くなるのではないかと思える点を二つだけ挙げることにしよう。第一は、「美学としての畸」というやや狭い観点だけに焦点が絞られていることだ。スポットが当たるのは、たとえば、祇園南海、柳沢淇園、売茶翁、池大雅、曾我蕭白、伊藤若冲、服部蘇門、深井志道軒、木

下長嘯子、石川文山、浦上玉堂、香川景樹、渡辺華山など、定番ともいえる文人たちが圧倒的である。こういう切り口はむろん貴重ではあるが、ここで編まれた文人伝の脇役として登場する有徳の学者、熟練医、貞淑な妻たち、忠義な召使い、孝行息子や娘など、文人以外の多彩な畸人の群が取りこぼされてしまう。脇役の何人かについては逸話として短く触れられているが、著者はこの論考の中に彼らを系統的に組み込もうとはしていない。もちろん、研究対象をどこかで区切る必要があることは十分承知しているが、もしもこういう非文人たちが取り上げられていれば、分析がより豊かなものになったのではないかと思わずにはいられない。たとえば、親孝行までもが「自己形成のための潜在要素」（二一四頁）と見なせるとはとても思えないからだ。

この「自己」への言及から第二の点を指摘したい。それは著者が「美学としての畸」を「社会的アイデンティティー」の問題という枠組みでとらえている点である。このことは本書の論拠の大半を占めている資料、つまり畸人伝と根本的に相容れないように思える。よく言われるように、人物伝というものがとかく主人公を理想化した聖人伝になりがちだとすれば、伝記は果たして現実を反映するにとらえてよいものだろうか。この点につき、歴史を書く者として著者は慎重な姿勢を崩さない。マービン・マーカス（Marvin Marcus）によれば、近世の伝記は、「客観的リアリズムとい

うより、主人公をある一定の望ましい姿の体现者として再現しようとする」(一一七頁)。著者の見解はこれと全面的に一致しており、『近世畸人伝』がしばしば伝記データを意図的に「畸」の証左に作り替えようと腐心している事実をきちんと指摘している(一二七頁)。これら人物伝に創作が付きものだとするなら、ではいったいどのようにしてそれをアイデンティティーの問題、自己発見、自己発案、自己形成の潜在要素として読めばよいのだろうか。伝記作家の立場に立てばたぶん可能だろうが、著者がそうしたように、畸人の立場に立つなら、とだいたいの無理な話だ。公平を期しておくが、著者自身、畸人伝の対象人物に迫るのは「本質的に不可能」であることは百も承知のうえで、「歴史的文脈に注意を払い、また、畸人たちをもっとわかりやすい規範と対置すること」(九頁)この問題は改善できるとしている。しかし、改善はけっして解決法ではないし、人物伝が本来持つ特性と、著者の主張する社会的アイデンティティーとのギャップが最終的にうまく埋められているとは思えない。だが、この論理的飛躍にもかかわらず、本書はなお、「美学としての畸」に関する言説と表象の歴史的变化を説明する研究として、その土台はみじんも揺らぐことがない。

こうした弱点はあるものの、本書はきわめて満足度の高い労作である。これまで敗者とひと括りにされるか、英雄と讃えられるかのいずれでしかなく、歴史の気まぐれな記憶として慰みもの扱

いされてきた一群の人々——もはやジャンルと言ってよいだろう——について、綿密な資料に基づくバランスのとれた初めての分析となっている。この畸人たちが当時の社会に命を吹きこみ、活力を注ぎ込んだのと同じように、本書は文人文化について、これからの議論を刺激し触発していくに違いない。

*本稿は、*Japan Review* No. 27 (2014) に掲載された英文テキストの日本語訳である。